



社会貢献者表彰
40年のあゆみ

目次

まえがき	3
	公益財団法人 社会貢献支援財団
「社会貢献者表彰40年のあゆみ」 の発刊にあたって	4
	会長 日下 公人
「絆を守った人々への感謝の40年・ 社会貢献支援財団の表彰を振り返って」	6
	中島 健一郎 財団評議員 大正大学客員教授
「白神の森をまもる」	27
	さかもと 未明 財団評議員 漫画家 作家
「社会貢献者表彰40年の記録」(資料)	80
①社会貢献者表彰区分別受賞者数 (昭和46年～平成22年度)	
②社会貢献者表彰区分別受賞者名と功績概要 (平成11年～22年度)	
③表彰内容の変遷	

まえがき

本財団は、昭和26年のモーターボート競走法制定から20周年を記念し、昭和46(1971)年5月1日に名称を「財団法人 競艇記念 日本顕彰会」として設立しました。

初代会長は、故笹川良一氏が就任され「よりよき社会を建設し、明るい日本の未来をひらくことは、私達のひとしく希求するところであります。これを達成することは、国民一人一人の努力にまつべきものであることは、言うまでもないのであります。なかでも一生を環境の厳しい職場に捧げた人、自らの危難を顧みず海難その他の事故や災害の救難にあたった人、人間の幸福のためきわめて有益な発明をした人など犠牲的精神、努力、創意工夫して専心社会に尽くした人々の功績は誠にはかり知れないものがあります。これらの人々に感謝の意を表わし、その功労に報いることはわれわれ国民として当然なさねばならないと信ずるものであります。」と設立の趣旨について語られ、社会貢献者の顕彰とその事業を後援する民間で全国規模の顕彰(表彰)事業を行なう財団として事業を開始しました。

この年から現在に至るまで、本財団は社会貢献者の表彰を例年実施しております。

この間平成13年の設立31周年を機に、名称を「社会貢献支援財団」に変更。表彰制度(内容)も平成11年度の大幅な改正をはじめ種々の改正を経て人命救助、社会貢献、特定分野(海の貢献)の功績を対象に表彰する現行の制度に至っています。

このようななかで、平成20年に公益法人制度改革が実施され、公益を目的とする法人が「公益法人」として法人格を取得するためには、改めて公益法人認定法による認定を受けなければならないところとなり、そのため新たな公益法人の認定取得に向け手順を進め、本財団設立40周年を迎えます平成22年8月31日に内閣府より公益財団法人 社会貢献支援財団の認定を取得する運びとなりました。

これも偏に日本財団はじめ関係者の皆様のご理解とご協力により事業を継続し、11,800件を越える方々を表彰させていただいた結果であろうと思うところでございます。

世の中は景気が後退するなかで、著しい人口の高齢化、自殺者の増加、不登校児や児童虐待の増加、地域コミュニティの崩壊等の問題を抱え国や行政の目が行き届かない分野においてボランティアの活動の果たす役割も一層大きくなり、その活動に対する表彰事業の重要性も増しております。

ここに「社会貢献者表彰40年(40回)のあゆみ」をまとめさせていただき、皆様に深い敬意と感謝を表し、さらなる発展を祈念するとともに新たな公益財団法人の目的を達成するために一層努力してまいりたいと思うところでございます。

社会貢献者表彰の40年のあゆみといたしまして、「平成22年度の社会貢献者表彰の記録」に「絆を守った人々への感謝の40年・社会貢献支援財団の表彰を振り返って」そして「白神の森をまもる(漫画)」に「社会貢献者表彰40年の記録」(資料)を加えまして特別号といたしました。

「絆を守った人々への感謝の40年・社会貢献支援財団の表彰を振り返って」は、夫々の時代と受賞者の活動につきまして、本財団評議員で大正大学客員教授の中島健一郎氏により執筆いただき、「白神の森をまもる」は、本記録集を都道府県の図書館等へお届けするところから、より多くの読者に善行が広がりますように、同じく本財団評議員で漫画家のさかもと未明氏によりまして、平成19年度受賞者の永井雄人(ながいかつと)氏の世界自然遺産である白神の森を守る活動を漫画化させていただきました。

ご一読いただきまして、忌憚のないご意見を頂戴できれば幸いに存じます。

今後とも本財団へのご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

公益財団法人 社会貢献支援財団

社会貢献者表彰40年のあゆみの発刊にあたって

公益財団法人 社会貢献支援財団
会長 日下 公人

社会貢献支援財団は今年から新しく生まれ変わって、これからの日本のため、これからの日本人のためになる新しい活動をしようと思う。

官にも民にもできないことをしようと思う。日本と世界は混迷の淵に沈んでいて、今は善行とは何か、悪行とは何かについても根本から考え直さねばならないときだと思うので、勇気を出して新しい道へ進みたいと思う。

これは私個人が日頃から考えていることで、これから行うことの当否は自分にも分からないが、幸いこの財団の歴史は古く関係者は多い。善意に満ち、善行に生涯をささげたたくさんの先輩各位のご指導とご賛成を得つつ、新しい道の模索に当財団は勇気をもって挑戦したい。

だが、社会貢献とは何かを具体的に考えることは意外にむづかしい。時々刻々と時代は変わり、社会は変わるから社会貢献の内容も変わる。根底にある善意に変わりはないとする考えもあるが、国際交流が深まると善意にもいろいろあることが分かるのでそれが混迷を招いている。その混迷の中から何かを選びとって表彰するのは、自分自身の立場や価値観を全面的に表明することだから、それは信念と勇気がある人にだけできることである。

信念不足、勇気不足の人がする表彰は官がしても民がしても個人がしても、とかく大勢順応的、形式的かまたは単に流行にのったものになり易いが、それでは表彰された人にも世間にも湧き上がる感動がなく、人々の意識向上や社会の進歩に貢献する効果もない。

社会貢献とは何か、についてこんな悩みをもっている人はたくさんいると思うが、その悩みはあまり表面に出ることはなく、表面は自明のこととして毎年毎年各方面で表彰や支援が行われている。

幸い、当財団の中島健一郎評議員は、同じ気持ちを共有して下さって、長文の原稿を寄せてくださったので、勇気百倍の思いで感謝と共にこの文を書いている。

まず日本で進行中の大きな変化を考えてみよう。

その一は、個人主義からの脱却である。家族主義や地域社会の連帯や職場での協力の喜びなどへの方向転換が感じられる。それは人と人の絆を求める動きである。その動きを先導する人や活動が尊敬を集めている。

その二は、理性偏重からの脱却である。大学の権威に頼らずまず現場にでる。理屈は言わないで現実をみて自分で考え自分が実行する。知より意、意より情の日本がもどってきた。新しい日本をつくるのはそういう人達である。

その三は、外国崇拜からの脱却である。アメリカでは…とか、イギリスでは…と欧米を先師と仰ぐ人は出羽守と呼ばれて急速に国民からの信望を失っているし、外国の方が日本の価値に目を向けはじめている。そうした新しいことへの価値判断に自主性がなくては、人々から信用されない時代が到来している。自主的判断は、とかく孤立するがそれを恐れてはならない。国民も同感なら同感だと支持を表明しなくては新しい時代はやってこない。

その四は、官尊民卑からの本格的な脱却である。今や官は道德的信用を失い、先見の明を示すことはなく、その上財政は大赤字になったから、最早官に有難味はない。国民はそれぞれ自分の力で生きてゆくことになるが、それは多くの場合、官益や官の面子と衝突している。国民の目から見ての善行が官の論理では悪行とされ、学者やマスコミもそれに従う現象があるが、今年はそのも限界に達することだろう。これからは国民が自らの良識によって善悪を選び、社会貢献活動を展開するようになるだろう。

その五は、これまで美德とされたことからの脱却である。「行きすぎた国際親善」、「現実無視の平和主義」、「実行不可能の弱者保護」、「高望みの経済発展」、「我身をほろぼすまでの進歩向上崇拜や努力精進の礼讃」などはイデオロギッシュに過ぎるとして昔日の輝きを失いつつある。

以上はほんの一例で、こうした時代の転換に際してわれわれ財団は、新しい価値は何かを考え、模索し、先行している人々に学び、そして自らが考えた新しい美德を表彰（ホントは感謝）という行為によって世に提示してゆきたいと考える。

それはわれわれ自らが日本の精神を、心の底から掘り出してみることではないだろうか。

その発掘力を英語では、セレンディピティという。ノーベル賞の世界では、偶然だらけに見える現実の中から珠玉の必然性を発掘した人を表彰して、“あなたにはセレンディピティがある”というが、私達にもそれが求められる。

特に日本にはセレンディピティがある人がたくさんいて、世のため、人のためになるよいことを自ら思いつき、自ら実行している。

“日本はいい国だ”

“われわれは幸せだ”

“日本は世界の模範だ”

“世界のためにこれをつづけよう”

と思う。

世界はこれから大きく変わると思う。

オバマ大統領は日本を来訪され、天皇・皇后両陛下に日本人が見ても驚くほどに深々と頭を下げて最敬礼をした。

日本がこれまで世界に対して良いことをたくさんしてきたことを、オバマ大統領は、身をもって知っているのだと思う。

我々も知らねばならない。そして何か新しいことをしようではありませんか。

皆さん！

絆を守った人々への感謝の40年

社会貢献支援財団の表彰を振り返って

評議員 中島健一郎

「表彰するっていうのは、ちよつと違うんですね。本当は謝恩なんだと思います。表彰するって偉い人が褒めてつかわすっていう感じでしょ。でも本当は表彰される人が偉くて、我々はそうした方々に感謝するってことなんです。だから表彰状を渡すんじゃないくて、国民からの感謝状をお渡しするって私は思っているんです」

社会貢献支援財団の40年にわたる表彰事業を振り返って、日下公人会長は、この事業の本質は、人間の絆を大事にし、損得に關係なく社会を支えた素晴らしい人々への謝恩であることを指摘した。

40年の社会貢献者表彰の受賞者の記録に目を通せば通すほど、私自身が日下会長がいわれるように「表彰でなく感謝だ」との思いを強めた。財団が表彰した人々の存在がなくては、世の中は成り立たなかったのではないか。新聞社で事件記者をしていたときには、殺人だの強盗だの放火だの社会の裏面ばかりを追いかけていたが、そうした事件はニュースにはなりやすいにしても、本当は社会を支えている素晴らしい人々の行為をもっともっと伝えるべきだったと、いまさらながらに痛感したのだった。

社会は様々な人々によって構成されており、それらの人々は決してバラバラに存在しているのではなく、家族、会社、サークルやコミュニティ、それに自治体や政府といった様々な単位や仕組みにかかわっている。「人はひとりでは生きていけない」というが、「人」という文字は支え合っている様の図柄のイメージなのだ。

過去40年間、社会貢献支援財団が表彰してきた1万1800人余の人々は、赤の他人であろうとなかろうと人にかかわって社会の絆を強めた。自らの命を犠牲にして他人の命を救った人の記録を見る時、自分のリスクを顧みない勇氣に圧倒される。そしてそうした勇氣ある人の命が召し上げられる矛盾を感じるとともに、そうした人が存在する社会でなければならぬとも思い、「果たして自分がその勇氣を持てるのだろうか」と自問するのだった。

表彰という行為を通して社会貢献の姿を世に知ってもらい、社会をより良いものにしようというのが社会貢献支援財団の目的だと思うが、表彰という表現や形態は便宜的なもので、「私にはその勇氣を持てるかどうか分からないのですが、あなたの行為には

頭が下がります。出来ることなら私も同じように生きたいのですが、とりあえず感謝させてください」という気持ちで40年間の財団の事業の根底に流れていると思う。

記録集に載っている人々は、表彰されようとか褒められようとか、何か対価を求めて行動したわけではない。とっさの時に必要だと思ったことをやった人。弱い人や困っている人を見過ごさず助けた人。淡々と持続的に世のため人のために活動した人。それらの人々の共通のキーワードは「人との絆に生きた」ではなからうか。

私がそうした人々について書く資格があるかどうかという不安を抱きつつも、「感謝」の気持ちを念じながら書くしかないというのが、記録集の「まとめ」を書くにあたっての偽らざる気持ちだ。2010年夏の大きなニュースのひとつは、都内男性の最高齢とされた111歳のミイラ遺体が発見された事件だ。32年前、部屋に閉じこもって79歳で息を引き取ったとみられるこの男性は、7月28日に数人の捜査員が訪れ、1階6畳和室のふすまをこじ開けるまで戸籍や住民登録上「生きている」ことになっており、その間の年金が支払われていた。このミイラ事件をきっかけに全国の100歳以上の高齢者の所在確認が始められた結果、わずか10日ぐらいで70人を超す所在不明者が判明。さらに数日後には150人を超した。

記録集を読んでいると、この所在不明は「絆」とは対極にある。自分に連なる人が所在不明になったら必死に探すのが普通である。ましてや亡くなったら葬儀を行い、墓に埋葬して弔うのが情というものである。死のうがいなくなろうが放っておき、自治体にも警察にも届けないというのは、年金を詐取するという卑しい根性なのか、絆の欠如なのか、ミイラ事件に発した所在不明高齢者の

騒ぎは日本社会がどこか狂い始めている証左のような気がしてならない。

前向きに果敢に努力する人への表彰 人間力への危機感から

社会貢献支援財団は昭和46年5月に、財団法人日本顕彰会（笹川良一会長）として設立された。事業目的は「運輸交通の安全と発展及び社会の安定と進展に寄与すること」であった。「各団体や地方自治体の推薦で社会貢献者を選考し、表彰することによって今後の一層のご活躍を願う人々の善意が社会のすみずみまで広がることを念じるものである」と、第一回の記録集のあとがきに記されているが、「今日の日本の姿を考えると何か把えどころのない複雑さとアンバランスが目立ち、人間一人一人の力も弱くなっているような気がしてならない」という危機感が根底にあることを表明している。

戦後の荒廃の中から日本は、経済復興を目指して遮二無二走った。講和条約締結で独立を果たした日本は、朝鮮戦争の特需に沸き、アメリカの豊かさにあこがれ経済成長路線を進んだ。皇太子ご成婚のミッチーブームや東京オリンピックで、戦後に一区切りつけたが、大阪万博や、新宿副都心開発には、すでにバブルの萌芽が見られる。

昭和42年には東大医学部の紛争が文学部に飛び火し、東大紛争が燃え盛り、44年の安田講堂事件を経て、内ゲバの時代、47年の浅間山荘事件に象徴される連合赤軍の事件が続いた。だが結局は学生運動の権力争いは内ゲバという悲惨な結末に向かってしまった。

まさに「複雑さとアンバランス」「弱まった人間力」に危機感を持たなければならぬ時代だったが、そうしたことを総括しないまま日本は「アメリカに追いつけ、追い越せ」と高度経済成長を目標とした。そしてバブル経済崩壊後、「絆の喪失」の坂道を駆け落ちているような気がする。

第一回昭和46年度の顕彰の記録を見ると、それまでの戦後を支えてきた人々の表彰が目立つ。「昭和21年戦後の混乱の中で、混血児とその母親達の援護に尽くし、文筆業の収入の3分の2以上を注ぎ込んだ」という平野威馬雄さん(明33・5・5生)。「売春防止法の施行とともに東京・練馬区に婦人保護施設「いずみ寮」、館山市に「かにた婦人の村」等を次々と開設した深津文雄さん(明42・11・22生)。離島にある「邑久光明園」のライ病患者のために33年間、船長を勤めた寺見有太さん(明45・7・20生)。

選考委員は財団法人日本船舶振興会やモーターボート競走関係者の他、運輸、厚生、自治省関係者。運輸交通関係功労者としては、人命救助や事故防止、現場業務に精励した国鉄職員、技師、船長、機長、信号工、保線手らが表彰されている。また一般功労者として各方面の人々の人命救助、社会福祉の増進、道義の高揚などが表彰の対象となり、善行者として地域の人々の環境美化、公德心の涵養などにも光が当てられている。

いつの時代にも世の中は事件、事故、災害はつきものだが、常に前向きに果敢に努力する人々がいて、世の中を支えていることを記録集は改めて教えてくれる。掲載されている顔写真を眺めると、誰もけれんみがなく、奢り高ぶったところもなく、良い顔をした人ばかりだ。

私が事件記者をしている時に、殺人事件の原因の多くには

「ねたま」「やっかみ」「そねみ」「うらみ」「つらみ」「ひがみ」など最後に「み」のつく気持ちがあると教えられたが、そうした「み」とは無縁な人々が表彰されていた。自分の命を捨てて人命救助した人に「み」が最後につく言葉はないのだ。

昭和47年7月20日午後4時頃、大分県東国東郡国東町の通称安ヶ浜海岸沖合80メートルの堤防で遊んでいた10歳の男子小学生が、高波に吞まれて流された。漁師の宮崎勲さん(大13・6・1生)は一刻の猶予もないと自宅から持ちだしたロープを腰に巻き、その一端を妻エミ子さんに持たせて海中に飛び込み、少年のところに泳ぎついたが、高波に吞まれて行方不明に。エミ子さんも夫と少年の安否を気づかい堤防上に立っているうち、襲った高波にやはりさらわれてしまった。「他人の命を救おうとして自らの命を絶った夫婦の悲劇は、あまりにも悲しいが、その人類愛の魂は、人々に語り継がれて永遠に消えることがない」と記録集は記載している。

また警察官や消防士の殉職の記載も多い。交通事故処理中に暴走車にはねられたり、燃え盛る家に閉じ込められた人の救出を試みた職務に誠実だった人々である。

そうした事例を読み進んでいると、浅間山荘事件で殉職した内田尚孝警視長(大14・1・2生)、高見繁光警視正(昭4・5・26生)の記述があった。

「昭和47年2月28日、日本中を震撼させ国民全部をテレビ、ラジオに釘付けにした長野県北佐久郡軽井沢町南軽井沢所在の河合楽器健康保険組合保養所あさま山荘における坂東国男他4名による連合赤軍の凶悪な人質ろう城事件に警備出动中、同日正午頃、両名は生命の危険をかえりみず率先被害者の救出活動に従事している時、不幸にも犯人の凶弾を受け、

兩名共壮烈な殉職をとげたものであるが、この惜しみて余りある優秀な警察官の価値ある犠牲によって間もなく犯人達は逮捕され、被害者は無事救出されるに至ったものであり、他の模範としてその勇敢な行為と魂は永遠に称えられなければならない「い」

私は新聞記者4年目の長野支局員だったが、高見警視正が撃たれた時、わずか10数メートル後方で取材をしていた。土囊の陰に身を隠した機動隊員たち。突然、高見警視正は立ちあがり、指揮棒を高く振り上げ、「突撃」と叫びながら、部下たちがついてくるかどうか確認するように振り返った。そして正面を向いた時、銃声が響いた。高見警視正の額から血が噴き出た。機動隊員達は高見警視正を盾の上に寝かせて5、6人が端を掴んで走って搬送した。額から流れる血が盾の中に溜まって行った。「隊長！死んじゃいけない」「隊長！隊長！」と泣きながら機動隊員達は走っていた。

この光景はいまだに目に焼き付いている。

当然のことをするすじや

社会貢献とは何だろうと記録集を読みながら考え続けた。根底には人と人の絆があり、それが必要な時に機能していると思うが、行為そのものはごく自然に当り前のこととして行われていることがすごい。「私はこんな社会を良くするためにこれを約束します」といった政治家のマニフェストのような訴えはない。いわば「不言実行」だ。

昭和47年度の運輸交通関係功労者の中に東京都の営団職員、山本均さん（昭24・5・13生）がいた。3月29日午前10

時頃、江東区小松川平和公園わきの駐車場で山本さんが自家用車を洗車中、公園の方から子供の泣き声と主婦の悲鳴が聞こえた。駆け付けると公衆便所の便壺の中に胸までつかかり汚物をかぶって泣いている3才位の男の子を発見した。山本さんは一刻も猶予できないと判断、自分の着衣の汚れもいとわず掃除用ホースをたらし、それにつかまらせ少し引き上げたところで両手をつかみ救出した。その後、救急車の手配をたのみ山本さんは姿を消したが、自家用車のナンバーから身元が分かったという。

多分、山本さんは自分のごく当たり前のことをしただけで、特別なことをしたとは思っていなかっただろう。記録集には山本さんのようなタイプの人命救助の例が沢山載っており、こうした人々の無言の存在の価値を実感させられる。また記録集には船乗り達の遭難救助の例も多く表彰されているが、海の男達にとって、遭難を見逃ごしにしないのは身体のDNAのようなのだ。

昭和46年1月12日午後8時、漁船「第21平栄丸」（47トン）は、銚子一の島灯台20海里の地点で操業中高波を受けて転覆、乗組員11名は海中に投げ出された。救助に急行した漁船「第3熊野丸」は8名を収容。甲板員だった渡辺義雄さんはなお一名が波間に浮き沈みしているのを発見するや、一刻の猶予もできないと判断し、着衣のままロープを持って暗夜激浪の中に飛び込み、苦心の末、ロープで遭難者の体を縛り、ようやく船上に引き上げ救助に成功した。しかし残り2名は行方不明となった。

海難事故は予想以上に多いが、海の男達は渡辺さんのような勇敢な救助活動で多数表彰されており、なんとも頼もしい。

また人命救助というようなドラマチックなことで表彰を受ける人がいる一方、現場で何十年も災害防止や作業技術の向上に努めたり、黙々と業務に精励してきた人々も表彰を受けている。世の

中のリアリティーはそうした人々の地道な努力で支えられており、日本社会が健全に発展した部分だと感じさせられた。さて当たり前のことをした人々、とりわけ便壺から子供を救いだした人に感激している時、最近の児童虐待の増加のニュースにはショックを受けるばかりだ。

警察庁が8月5日に発表した2010年上半年（1～6月）の児童虐待事件の検挙件数は、統計を取り始めた2000年以降で最多の181件に達した。検挙者数は199人で、09年同期比34人増。被害児童数は187人で同23人増だ。

罪種別では殺人12件、傷害109件、強姦11件、保護責任者遺棄9件など。被害児童の年齢別では0歳が25人、1歳11人、2歳10人、3歳13人など乳幼児が増える傾向が目立つ。近隣や医師からの通報が増えていることも過去最多の一因と指摘する専門家もいるが、地域からの家庭の孤立や貧困などが背景にある。つまり「隣は何をする人ぞ」とばかり、地域社会の絆が崩壊し、子育てに悩んでいるようだったら相談にのったりする人が周りにいなかったのだろう。

児童虐待防止法では18歳未満が被害者になり、保護者が加害者の場合、児童虐待の統計に加えられるが、警察が把握しない水面下のケースは想像以上に多いと見られている。

子供の被害は保護者であるかどうか関係ない児童ポルノでも増大している。やはり警察庁のまとめでは、全国の警察が摘発した2010年上半年期の児童ポルノ事件は599件（前年同期比63.2%増）だった。これも統計を取り始めた00年以降で最悪。被害児童数は295人で中学生が一番多く126人。次いで高校生95人、小学生以下も63人などとなっている。

児童虐待も児童ポルノ摘発も氷山の一角と見られるから、今の

日本は守られるべき子供たちが、トンデモナイ事態に直面する悲しい国になってしまったとも言えるのだ。

社会貢献者表彰の式典やパーティーでお会いする方々の顔を拝見していると、いつも「日本も捨てたものではない」と感じるのだが、そうした反面、地下鉄などに乗って乗客を観察していると、あまりにも多くの疲れきった顔、他人に無関心な顔、焦点の定まらない目線の顔などを見る。

関係的困窮からの救済

リーマンショック後の不況の中で、企業は非正規雇用者のリストラに走った。労働者派遣事業の規制緩和により、この十数年で「年収100万円前後～300万円前後の非正規労働者が増えた」（2010年度労働白書）。そうした非正規労働者の多数が雇用調整により失業し、ホームレスが沢山生まれた。

NPO法人ホームレス支援全国ネットワークの奥田知志理事長によると、失業によって会社の寮を出なければならなくなった期間工や契約社員は家に象徴される物理的困窮に追い込まれた人がいた。いわゆる「ハウスレス」であり、全国各地で住宅喪失への支援が行われ、国の施策も同様の住む場所の確保だった。

しかし「ホームレス」は家族に象徴される関係的困窮を意味するが、その関係的困窮に対する支援はほとんどなかったという。

つまり家、衣服、食物、保証人——などの「ハウスレス」対策で、支援を受けてアパートに入居できても「俺の最後は誰が看取ってくれるのだろうか」という新たな問いが生まれるという。だが、その「人間的な問い」への支援は重視されてこなかった。

戦後、日本の社会保障は「経済的困窮」と「身体的困窮」を中

心にハローワークや生活保護制度、病院、老人福祉、障害福祉などで対応してきた。しかし「関係の困窮」は地縁、血縁がどんどん薄れる中で、増大の一途をたどってきた。

かつては失業したら田舎に帰った。兄弟や友人が「職が見つかるまでウチに居ればいい」と助けてくれた。ところが今の日本では、単なるハウスレスでなく、本当のホームレス（関係の困窮者）にならざるを得ない。

奥田理事長は「いざという時に助けてくれる人がいないという絆の欠如が自立意欲醸成や制度利用を行き詰まらせる」と指摘する。また「人は他者との関わり（絆）の中で、自己の存在意義を知るが、絆の欠如で“自己喪失”という深刻な状態になる」という。

昭和48年度の地域善行者の中の「青少年の善導、非行化防止等その指導、育成に努めた功労」で表彰を受けた品川博さん（大5・5・21生）は、記録集に次のように記されている。

「昭和21年3月に復員して祖国日本で見たものは、荒廃した社会と街頭に溢れている孤児浮浪者の群れでありました。日本の復興再建には青少年の育成が第一であると感じた品川さんは帰国早々浜松市葵寮に勤務して恵まれない少年達の育成に生涯の第一歩を踏み出したのであります。昭和22年12月5人の少年とともに上京して上野地下道を宿として靴磨きをして自活する等幾多の困難を経て昭和23年前橋市に少年の家の前身である群馬県委託児童福祉施設を発足させ、昭和28年12月現在の鐘の鳴る丘少年の家を設立し、以来今日まで多くの孤児と寝起きを共にし、我が子のように面倒を見て可愛がり立派な成人として世の中に送り出すことを唯一の願いとしております。品川さんのお世話になった上野地下道時代の第一期生5人の少年は、今はみな立派な社会

人となり、中でも大学教授、医学博士、億萬長者の大会社社長となった3人の方々もその仲間だったということです。品川さんのその崇高にして立派な信念のもとに今も多くの少年達は逆境にもめげず勉強に励んでおります」

この記録を読むと、品川さんは家族の絆も社会の絆も失っていた孤児浮浪者の絆を回復し、住む家を与えるだけでなく「関係の困窮」から救いだしていたと感じる。戦後の荒廃の中に「絆」の復活があったことを考えると、「関係の困窮」が広がる現代日本の今の時代にも奥田理事長が訴える「絆の制度化」が急がれるのかもしれない。

品川さんとともに表彰された人に和田ツマ子さん（大2・1・30生）がいた。この人は女優で芸名小暮実千代である。戦後間もないころ仕事帰りに駅頭で見かける浮浪孤児にいつも金銭を恵んで激励していたが、品川さんが園長を勤める「鐘の鳴る丘少年の家」の後援会長を20年務め、物心両面の援助を続けたという。和田さんは昭和48年9月には法務大臣から芸能人としては最初の保護司に発令された。

女優といえば同じ年度に本目真理子さん（昭和2・3・21生）が「社会福祉への貢献」で表彰されている。本目さんは、芸名宮城まり子。昭和43年静岡県小笠郡浜岡町に私財を投じて肢体不自由児の施設「ねむの木学園」を設立し、自ら園長となった。宮城まり子さんは私が毎日新聞東京本社社会部長をしていた平成7年の「記者報告会、いじめ事件」に参加してくださったことがある。当時のいじめ事件に宮城さんは心を痛め、悲しんだ。

「ねむの木学園」は設立以来、ずっと宮城さんの優しさに包まれて、いじめなどとは無縁な世界を持続していたのだった。

同じ年度の表彰者には加藤浜子さん（明43・10・27）の名もある。歌手で芸名渡辺はま子さんは昭和の初期から有名な歌手として広く親しまれてきた人だが、歌を通じて国際親善に努めた。特に第二次大戦によるフィリピン国民の反日感情をやわらげ日比文化交流に成果をあげ、モンテンルパ刑務所から旧日本軍兵士の釈放に尽力したという。

女優、歌手といった脚光を浴びる人々の中にも「絆」を大切にする人がいることをこの年度の記録集から読み取ることができた。

永遠に残る徳

記録集を読みながら私はドラマテックな事例や代表的なケースを無意識に探していた。しかし読めば読むほどどの事例にもドラマが隠されている、と感じ始めていた。

子供の育成が国の未来を作るという信念から地道に子供たちについていろいろなことを教え導いた人、世間がなるべく関わりたくない、隔離に走ったらい病患者の看護、世話、相談にのった人、雇用を創出し雇用を守り、人々に生きる糧と生きがいを提供した人など、どの人にも素晴らしいストーリーがある。自分の想像力の限界や乏しさを嘆き、たまたま自分が勝手に選んだ表彰者だけ取り上げて、勝手な意味付けをするおこがましさに私は悩んだ。

だからこのまとめはそうした限界と迷いの中で書かれ、私の独断と偏見に影響されていることをご理解いただきたい。

さて昭和48年度の記録集には2件の特別功労の表彰が載っている。1件目はフィリピン人のイレネオ・カブレラさんとビダル・モレノさんの表彰。昭和20年3月、フィリピン・パナイ島に上陸してきた米軍と日本軍の戦闘の際、老若婦女子60人が捕虜と

なることを恐れて集団自決した。カブレラさんらは日本人幼児3人を救い出し、安全な場所にかくまって、戦後も家族同様に養育したのだった。マニラを訪れた笹川会長が二人が幼児を助けたことに感銘し、表彰に至った。もう1件はドイツの少年、ディーター・シュルツァーさん（13）が昭和48年8月、ヨーロッパ・アルプスのアイガー北壁で、日本人2人が遭難して助けを求めていたのを望遠鏡で発見し、警察に知らせたヘリコプターが出勤し救出されたケース。社会貢献者表彰は国際的な事例にも当初から目配りしていたのだった。

昭和50年12月10日、港区三田の笹川記念会館国際会議場で開かれた表彰式典で、日本顕彰会の笹川良一会長が行ったあいさつの中にこんな印象的なくだりがある。

「私は、毎日一つのことを繰り返し、繰り返し自分の心に申し聞かせております。それは、私も人間は、生まれた瞬間から一秒たりともどまるところなく、墓場に向かって進んでおるということであります。何が価値高いものかと申せば、人間というのは錯覚がありますから、多くの金を出したものが価値高いものだと考えておりますけれども、一番価値高いものは、金で買えない空気であり、水であり、時間であり、太陽であります。特に時間というものは大切であります。どんなに金銀財宝を山ほど持っておりますけれども、死ねばその瞬間に、われわれのからだから離れていくのであります。そういったものには私は執着がございません。ただ残るものは、世のため人のために善を行い、徳を積んだその徳だけあります。皆さんは、その何人もとることのできない、しかも永遠に残るところの徳を積んでいらっしゃるのであります。そういう人たちこそ、私はだれよりも尊敬いたしますのであります」

この笹川会長のあいさつを読んで私はとても共感し、この40年間の表彰事業の根底に流れている精神を感じた。「人間は何も持って死ねない。死ぬ時は全て神様にお返しするのだ。だから生きていく間に何をすることが大事だ」というのがずっと私が信条にしてきたことだった。

ではアトランダムに48、9年度の表彰を受けた人々の徳を見ていきたい。まずは「赤ひげ先生」達が日本全国のへき地や離島、農村地帯で地域の医療を支えている。その中の一人、若月俊一先生（明43・6・26生）はとても懐かしい名前だ。記録集には「長い間長野県下で病院長や農村医学研究所長として活躍されておりますが、これまで、なおざりにされていた農村の保健と医療問題についての研究に従事され、農夫症や農薬など農村特有の問題を解明して農村に働く人達の健康の増進に努め、産業の発展に大きな貢献をしています。また若月さんは国際的にも学界に貢献し、昭和44年には第4回国際農村医学会を日本で開催してその学会長をつとめ、昭和48年秋の第1回アジア農村医学会議をこれまた日本で開催してアジア特有の疾病についての研究成果を発表するなど農村の発展に尽くされた業績が極めて大きいといえます」とある。

佐久総合病院に昭和45、6年ころ若月先生を訪ねたことがある。同病院は検診の巡回車を野辺山高原など医療過疎地に派遣して、若月先生をはじめ若い医者から看護師まで農村医療に燃えていた。このため長野県内でも佐久地方は医療水準が上がり、注目されていた。駆け出しの新聞記者だった私はそうした活動を日本全国に知らせたいと取材したのだったが、うまくまとめきれず大きな記事にしそくなった記憶がある。

若月先生は農村医療の話の他、ベトナム戦争での枯葉剤による

新生児の障害について、真剣に語られたことがとても印象的だった。シヤム双生児のドクちゃんベトナムちゃんのような枯葉剤の影響の出た写真を現地に行って沢山撮っておられた。農薬について農作業をする人たちへの影響を研究していたことが、ベトナム戦争の後遺症への関心と結びついていたのだった。

岐阜県本巣郡根尾村で診療所長を勤めた黒川栄さん（明43・2・5生）も赤ひげ先生だ。昭和42年2月12日、「県境の奥地で不全流産で出血多量による死の危険がある患者が出た」という知らせが届いた。黒川所長は吹雪の中1メートルの積雪をかき分け5時間半も歩いて患者宅にたどりついた。午前2時半に手術を終えて無事、患者の命を取り留めたが、往復40キロの決死的往診だった。日本のへき地医療はこうした医師に支えられていたのだった。また看護師や助産婦の人々も山間僻地でしっかりと働いて、赤ひげ先生に劣らぬ活躍で表彰されている。

経済繁栄より心豊かな国を

表彰者で目立つのは理容業の人が身体障害児や知的障害児の施設や養護施設、福祉施設を定期的に訪問して髪の毛を刈って喜ばれていることだ。また寿司屋さんが様々な施設に行つて「今日は腹いっぱい食べてください」と無料の出前握りをしているケースも多い。最初は店の経営者だけが行っていたら従業員全員が「私も参加します」と、毎月総出で施設を訪問して寿司を握っているケースもあった。中華の無料出前も表彰されていた。

お寺の住職や神社の宮司さんが、境内を開放して様々な社会貢献をしているケースも多く、地域社会に根付いた宗教家の存在感がかつてはしっかりとっていたこともうかがえた。

松山市柳井町の法龍寺住職、栗田伸美さん（大13・11・1生）は自分が里子として養育されたこともあって、昭和28年から16人の里親となり、子供たちを養育。さらに財団法人全国里親会の理事なども務めて里親運動を広めたことで表彰された。昭和50年の記録集には戦災孤児などを引き取った里親の記録が沢山載っている。

平成22年の夏は異常な猛暑が続いた。100歳以上の所在不明者が続々と判明する中で、高齢者が熱中症で死ぬなど、日本が高齢社会化に対応できていないことが浮き彫りになってきた。日本がどのような国を目指しているのか、政治もまた混乱の度合いを強め、熱帯夜の寝苦しさは増すばかりだ。そして大阪では離婚した23歳の母親に置き去りにされた二人の幼児が食事も水も与えられないまま死ぬというむごい事件が起きた。

逮捕された母親の親としての責任感のなさに啞然とする。精神鑑定も行われるが、その母親だけの問題だろうか。離婚して二人の幼児を抱えて若い女性が生きていくことは簡単なことではない。ちゃんとした就職をするのはまず無理だし、風俗関係の店で働いておれば、肉体的にも精神的にも疲れ果ててくるだろう。そうした時に子供を置き去りにすることの恐ろしい結末を想像することができただろうか。

問題はそうした追い詰められた状況にあるとき、救いの手があるかどうかだ。「プライバシーに踏み込めない」などの理由をつけて行政は及び腰だ。児童虐待や高齢者の所在確認ですら後手後手に回るのだから、母子家庭への相談や援助がまっとうに行われるのはよほど担当者の覚悟が決まっている場合だろう。そして今、行政の隙間を埋めてきた里親のような民間のセイフティーネットまでがほころびていると感ずる。

平成13年度表彰式典祝賀会で日本財団の笹川陽平理事長（現会長）は昭和46年5月1日に設立され、平成13年8月27日に日本顕彰会から社会貢献支援財団となった財団の設立の趣旨について「これからの日本は経済で栄え、精神的なもので減っていく国になる。日本の国の良き伝統、良き習わし、良き習慣を通じて、それぞれの場所で、それぞれの能力に応じて、社会のために黙々と働いている方々を激励することによって、古来から持っている日本人の良さを発揮し、単にお金だけではない心の豊かな日本国を国民が作っていかなければならない」と述べた。

精神的なものが減んだ場合、経済だけが栄えることは無理ではないか。子供すら守れない日本の経済的發展などにはあり得ないと思うのだ。

今の日本は所得格差が拡大している。だが強いもの豊かな人が社会貢献しているわけではない。

記録集によると、米沢市の内藤まつさん（明33・4・1生）は若いころ病気のため両眼を失明したが、二人の子供を育てあげ、40数年の光を失った生活の中、「何か世のためになることを」と、雑巾作りを続け、小中学校や公民館に寄付し続けたという。

大和市の伊東才治さん（大12・5・17生）は戦争で左眼を失明した身障者だが、二級建築士の仕事の他、市内1200名の心身障害児を一人一人訪ねて激励することを日課としている。

内藤さんも伊東さんも自分が身障者であることを不幸に思うより、人のために自分が出れることをやったのだ。自分の幸福ばかり追い求めると人は不幸になり、人のために尽くすと感謝されるため、現代の風潮は「自分さえよければ」になっているため、人々の顔が輝いていないのではないか。

昭和49年度の記録集を眺めていたら、懐かしい顔を発見した。東京都練馬区北町の町田欣一さん（大14・8・1生）だ。昭和23年から49年まで警視庁の筆跡鑑定や心理学者として勤めた町田さんは「特に連合赤軍の浅間山荘事件、日航ハイジャック事件など重要事件に際しては犯人の説得に大きな効果をあげ、更にはルバング島の小野田さん救出活動にも陰の大きな力となりました」とある。事件記者のころよく夜討ち朝駆けで自宅に押し掛けしたが、厭な顔ひとつされずに応対していただいたことを思い出す。

この年度では千葉県市原市の鈴木紀夫さん（昭24・4・25生）がやはり小野田元少尉捜索で表彰されている。鈴木さんは国が長年、多くの費用、人員を動員して元日本兵の捜索をしているものの目的を達成できない中、意を決して単身ひそかにルバング島に渡り、ジャングルの中でテント生活を始め、数日で小野田さんとの出会いに成功したのだった。

鈴木さんは小野田さんの写真を撮影し、情報を集めた上で、捜索隊員や現地政府に連絡など適切な処置をして小野田さんの救出につなげた。

同年度には4月7日に胃がんでなくなった臼井銀次郎さん（大8・5・4生）が表彰されている。臼井さんは松戸市の「すぐやる課」の初代課長。最近の高齢者が所在不明になったまま、年金が支払われていたりする事態が相次ぐと、もう一度「すぐやる課」を日本全国の自治体に設置すべきだと感じる。

有名になりたがらない人々

社会貢献支援財団の評議員会で、時々、表彰の意味について議論することがある。時代とともに社会貢献の形が変わってきたり

するという問題意識からだ。官庁主導の社会貢献ではなく民間としてどのように社会貢献を定義するかを考えなくてはならない。「アングロサクソンとは違う我々、日本人という人間集団が共有している価値感で、現実的・实际的に表彰事業を運営したいので議論していきましょう」と日下会長は問題提起している。

「水戸黄門がいう親孝行は偽善的という人がいるが、偽善でも親孝行は良いという政治的判断があってもいい」とか「米国には民間人に対する勲章はない。軍人だけ」「米国にはピューリッター賞とかオスカー賞のような賞がとて多い」「たまたま人命救助した人と、何十年も縁の下で力持ちの社会貢献した人との違いは何か」「人命救助はたまたまでも自分の命をかけた人の勇気には頭が下がる」など議論は尽きない。日下会長は「多少、物議をかもしても大胆に表彰して行こう」との方針だ。

社会貢献支援財団が40年間積み上げてきた表彰は実はますます重要になってきているのではないか。たまに「ほめてもらおう」と思っただけのことではないから」という理由で表彰辞退がある。

今の時代は有名ことが幅を利かせ、有名になりたがる傾向があるが、まったく正反対の精神だ。人にほめてもらわずに、人に評価されようがされまいがやるべきことをやるという精神は本当にすごいと思う。ある精神科医の人が「自分は真剣に勉強し、外国にも留学して、最先端の精神科医になった。ところがそれは評価されず、テレビに出たら周りからすごいねと言われた。今の時代はテレビに出て有名になることがもてはやされているが、おかしい」という趣旨の発言をしていたがまったく同感だ。

政治家にしてもテレビに出てワーワー騒いでいる人が顔を知られ選挙に強くて偉いように思われているが、本当は地道に政策を

研究して議員立法するような政治家が評価されないと駄目だと思
う。米国には上下両院議員ひとりひとりの投票行動や議員立法の
活動を調べて評価する仕組みがある。

日本では人気者が偉いという風潮で、小中学校でも真面目な子
より、イケメンとか皆を笑わせる子がもてはやされる。テレビの
コメンテーターは、自分の専門外でもコメントしてしまふ。「そ
のことについては自分の専門ではないのでコメントは差し控えま
す」といった謙虚な人は排除され、筋書き通りに上手に喋る人が
大手を振ってまかり通る。なにやら日本は軽重浮薄な様相を深め
ているのだ。

そうした日本の現状にあって社会貢献表彰は「ほめてもらおう
と思つてやったことではないから」という謙虚で地道な活動を続
けている人々を発見して、すこしでも世間に「こうした人々が実
は世の中を支えているのだ」と知らせてきたのではないだろうか。

昭和53年度に表彰された高橋昌彦さん(大9・4・8生、東
京都練馬区上石神井)は自分の子供を小児がんで奪われたことか
ら、子供をがんから守る活動を始めた。壁谷正敏さん(昭8・7・
29生、愛知県江南市)は一人息子が筋ジストロフィー症におか
されたことから(社)日本筋ジストロフィー協会の創立に尽力し、
息子を失ったあとも地域福祉に邁進した。記録集には自分の家族
を守る闘いから社会貢献に進んだ例が多く記録されている。

また多々良友彦さん(昭5・10・25生、静岡市)は、自分
が突然、全盲になったことを克服した人生から障害者の施設「静
岡光の家協会」を設立した。多々良さんのように自分がハンデを
抱えた人の社会貢献の例も多く見られる。

持続する情熱

記録集を読んでいてすごいなと思うことのひとつは、それぞれ
の社会貢献活動が長いこと継続していることだった。人は誰でも
「こんな人になりたい」とか「これを実現したい」と思うが、た
いていは一時的な情熱で終わってしまう。だから持続する情熱を
持った人が、何かを達成しており、人に感動を与えるのだ。

平成3年に特別表彰された歌手、俳優として著名な杉良太郎さ
んは、実は51年間も様々な社会貢献を継続している。歌が上手
だった杉さんは15歳のときに目の不自由なピアノやアコーディ
オンの上手な先生と当時の養老院の慰間に行った。それがきっか
けで勤務所にも慰間に行くようになったが、今は法務省から特別
矯正監に任命され全国の刑務所の指導も行っている。

杉さんは私のインタビューに「刑務所は、慰間をする場所とし
ては一番難しいところ。一人相手にするので大変なのに、千人
も集まったところでしっかり反省してもらい更生を促すには、全
身全霊をかけた勝負をしなければならない」と語った。

杉さんは国際的にも福祉活動を持続している。記録集には「国
内各地で幅広い福祉活動を展開し、やがてその輪は海外に及ぶ。
昭和53年米国・ロサンゼルス、ハワイ、中国、シンガポール、
マレーシア、タイ、ベトナム、ブラジル等でチャリティー公演や
各種福祉施設への慰間を行い、更に、アフリカ難民救済、中日青
少年友好交流基金や子供を有害薬物から守る財団ジャスト・セ
イ・ノー・インターナショナルへの寄附等々、その事例は枚挙に
いとまがない。氏のこうしたチャリティー活動の精神が高く評価
され、平成2年3月タイで開催の国際識字年サミットの決定によ
り世界初のユネスコ特使に任命され、アジアの識字運動にも惜し

みない協力をしている」とある。

ではなぜ杉さんの活動は国際的な広がりを持ったか。

「ひとつにはアジアの国に日本は太平洋戦争で迷惑をかけたからだ。1972年、27歳の時に、北と南を分ける38度線最前線の韓国軍兵士を慰問に行った。それから中国、そしてアジアの国々へ。自分が出来る人道支援をした。また並行して日系移民が世話になったハワイ、ロサンゼルス、ブラジルに行った。いろいろ歩いてベトナムほど戦争を強いられたい国はないので、日越文化交流協会を作った。日本を手本に立ち直ってください、という気持ちだった。日本語と文化を教えるハノイ日本語センターを作り、卒業生は数万人に上る」

杉さんはベトナム政府からベトナム日本特別大使に、日本政府から日本ベトナム特別大使に任命された。

2010年秋は尖閣列島周辺海域での中国漁船による海上保安庁の艦船に対する体当たりから日中間はぎくしゃくした。中国はハイテク機器に欠かせないレアアース（希土類）の対日輸出にブレーキをかけた。中国だけにレアアースを依存しているわけにはいかない。

同年10月31日、日本政府とベトナム政府はレアアースを共同開発することで合意した。菅・民主党内閣にとって久々の明るいニュースだった。ベトナム北部のドンパオ鉱床の開発は企業間で計画が進められていたが、ベトナム政府の採掘許可が下りていなかった。日本の年間消費の1割を賄える同鉱床を確保できたことは、レアアース調達の中国依存を減らす第1歩だった。

実はこの合意の陰に杉さんが築いたベトナムでの信頼があった。10月初め経済産業副大臣と訪越した。この時ハノイは千年の祭りで閣僚が忙しく、党の幹部は地方に遊説に出かけていたが、ウ

ルトラCとも言える交渉を重ね、4人の閣僚と会い交渉を進展させた。残念ながら、この時、在ベトナム日本大使は交代時期でその権限がなかった。「両国の国益の為、特別大使の任務を果たしているだけです」と杉さんは言う。しかし草の根の信頼関係が交渉を進展させたことは忘れてはならないと思う。

ところで杉さんは、ある国で日本大使に面と向かって「やっぱりあなたは売名のために活動しているのですか？」と言われたことがある。むっとしたが、杉さんは「ええ、売名ですよ」と答え、それから「僕と同じことを売名でいいから、自分の時間とお金と心を使ってやってみたらどうですか」とやんわりと相手を諭したという。

杉さんは芸能活動で稼いだお金を社会貢献につき込み、中国公演で約束した「残留孤児に5千万円、青少年育成基金に5千万円寄付する」との約束を実行する資金がなかった。そこで当時の住友銀行の会長に「僕の身体を担保で貸していただけませんか」と頼んだことがある。その会長は「身体を担保で借金して寄付する人は聞いたことがない。杉さん、老後はどうするの？」とあきれたが、それでも1億円貸してくれた。長期で借りたので返済は1億7000万円に上った。

「持続する情熱の秘密は何ですか」と質問すると、杉さんは「献身に熱くなった時期もあるけど、51年間もボランティアが続いたのは、いつまでやってもよし、いつ止めてもよし、と張りきらないできたのがよかった。義務とか責任とか自分を追い詰めないように自分に言い聞かせてきた」という。

だが17歳の終わりから修行のために2年間、カレー屋で無報酬、無休で働いた根性が杉さんの社会貢献のバックにあるとインタビューで感じた。「性格は持続の性格だ」と笑う杉さんと握手

すると、厚みのある手でがちっと握られた。奥さんの歌手、伍代夏子さんは警察関係のボランティアをしていて良き理解者だという。

記録集を読むと、杉さんのような著名人でなくても自分の志を持って社会に持続する貢献をしている人が多く、世の中はそうした人々に支えられているという実感を強くした。

日本のビル・ゲーツたち 個人や民間団体が活躍する時代へ

金持ちといわれるビル・ゲーツ氏と東京で会ったことがある。氏が所有するレオナルド・ダ・ヴィンチの手書きの原稿（レスター手稿）の展覧会を毎日新聞社が森美術館で行った関係で挨拶したのだった。

ゲーツさんは年に1カ国だけ手稿を貸し出す。多くの国の人（特に子ども）にダ・ヴィンチの天才に触れてもらいたいとの考えからだ。ゲーツさんは奥さんとビル&メリンダ財団を作り、世界の子供の教育や貧困問題に取り組み自分の財産を注ぎ込んでいる。そして自分以外の富豪たちに「生涯に稼ぐ金の半分は社会貢献に使おう」と呼びかけている。

このゲーツさんの呼びかけにアメリカの沢山の金持ちが続々と寄付し始めている。「連邦政府に税金で納めると、イラク戦争のような自分が反対していることに使われる可能性がある。ビル&メリンダ財団に寄付すれば子供の福祉に使われるのははっきりしている」という「自分の金の使途は自分で決めたい」という理由が多いのだそうだ。寄付金控除がちゃんと認められるお国柄も反映している。

未来学者アルビン・トフラーの会社トフラーアソシエイツが2010年10月に発表した「今後40年の40の未来予測」によると、今後は政府や役所ではなく、個人や民間団体が様々な分野で影響力を拡大するという。個人や民間団体でもグローバルに情報を集めることが出来て、理想を共有する人々をネットワークで結び、社会貢献活動を展開できる時代になったということらしい。ゲーツさんはその先駆的な存在だという。

さて社会貢献支援財団の活動も民間として先駆的な活動の模範例だと感じる。そして寄付金控除がほとんど認められない日本にあつて、個人の金をゲーツさんに劣らず寄付している人が表彰されている。

昭和54年度表彰の鉄工業、大坪康秀さん（大14・11・12生、福岡県山門郡大和町）は10年以上も寄付などで社会責任を果たしている。たとえば地元小学校に文庫設置（300万円）、テレビ10台、剣道防具100組、奨学基金500万円、町内6小学校の新入児童の黄色い帽子購入費に計200万円。また消防車購入や交通安全施設のため1350万円など。

岐阜市の杉山日出雄さん（昭3・12・6生）は結婚当初から毎年、記念日に福祉事業に寄付することを決め、最初は1万円ずつを3万円、5万円、10万円と増やしていった。昭和53年には100万円を寄付し、「健康で働ける感謝の気持ち」と生涯、継続する意向だ。

大坪さんや杉山さんは自分が稼いだお金を継続して長く寄付し続けている。また日本には、歳末助け合いとか、災害とか難民支援の寄付が沢山のひとから寄せられるという善意の土壌もある。日本は税制上の寄付金控除をもっと拡大し、様々な個人や民間団体がそれぞれの立場で有効なお金の使い方が出来る余地を拡大す

べきだろう。その方が事業仕分けて指摘されるような無駄がなく
なるはずだ。

昭和56年度表彰の農業、大村正生さん（大12・3・25）
は、昭和34年に民生児童委員に就任して以来、生活困窮者に更
生資金を貸し付け、新事業を指導して自立させた。また50世帯
もの母子家庭にも資金の貸付を実施した。大村さんは寝たきり老
人を施設に収容したり、障害者を持つ家庭に公的な福祉制度の活
用を指導するなどのことも行っているが、資金を貸し付けて自立
できるように指導する点が特徴的だ。

記録集を見て感じたことに大村さんのように困っている人の相
談にのり、自立支援もする民生委員や保護司が日本の社会を支え
てきたということがあった。今、そうした民生委員や保護司のな
り手が減って来ているのが現状のようだが、個人やNPOとかN
GOといった民間組織が機能する仕組みに切り替える節目かもし
れない。

命がけの救命。最後まで責任を負った人々

平成11年11月22日、埼玉県人間基地に向けて帰投中の航
空自衛隊T33A型ジェット練習機にトラブルが発生。機体は振
動し、コックピットに煙が充満した。操縦していた飛行時間50
00時間を超えるベテラン、中川尋史さん（当時47歳）と門屋
義廣さん（当時48歳）の二人は狭山ニュータウンの住宅地に墜
落するのを避けるため、入間川河川敷へと操縦を続けた。緊急脱
出した時にはすでに安全に降下できる高度以下になっていた。地
面にたたきつけられた二人は殉職。狭山リバーサイドゴルフ場コー
ス内に墜落した機体は激しく炎上した。

選考委員の渡部昇一さんは平成14年の記録集に「文句なく頭
が下がるのは、命がけで救命活動した人たちである」と、この二
人の殉職を取り上げ、胸がつまるような感動を覚えた、と書いて
いる。

平成13年度の表彰者の中にも自分の職責を全うして命をか
け、感動を呼んだ人がいる。

福井県の京福電鉄の佐々木忠夫運転士（昭18・10・26
生）である。平成12年12月17日、越前本線で永平寺発の電
車の制動力を車輪に伝えるブレーキロッドが破断し、ブレーキが
効かなくなった。佐々木運転士は無線の警報装置を作動させ、手
動ブレーキを操作し続けた。しかし非常ブレーキも緊急停止のた
めの「非常用」になっていたが作動しなかった。福井発勝山行き
電車と正面衝突し、佐々木運転士が死亡、25人の乗客が重軽傷
を負った。

最後まで運転席にとどまり、手を必死に動かしている佐々木運
転士の後ろ姿を乗客が見ている。「ちょっと後ろに逃げれば助かっ
たのに」と、同僚たちは責任感の強い佐々木運転士を惜しんでい
る。

渡部選考委員は小学校の時に「木口小平は死んでもラップを口
からはなしませんでした」という逸話を読まされて「死んでも義
務を果たそうということの尊さを知らされたのである」と書いて
いるが、航空自衛隊や京福電鉄の事故の例でも同じ職責を貫くす
ごさを知るのだ。

「教科書にそういう話を入れさせる運動」や「絵本にするのを
助ける」ことを渡部選考委員は提案しているが、まったく同感
だ。

時代の要請に応えた「こども読書推進賞」

平成15年から19年までの5年間、社会貢献表彰の中に「こども読書推進賞」が設けられた。私が社会貢献支援財団とご縁が出来たのは「こども読書推進賞」の選考委員になった時からだった。こどもが本を読まなくなり、学力の低下が問題になっていた時代で、青少年育成には読書は欠かせないという危機感から設けられた賞だった。

「ヨーロッパ系の文化」という言葉は、何れも耕す」という言葉に関係がごさいます。自然の状態にある人間の心を耕して作物が出来るようにすること、それが文化、教養でございませうが、文化の中で決定的なのが言葉、特に優れた言葉を文字で残した古今東西の偉大な人たちの言葉でございませう。その意味で読書は、子供にとって、子供を人間らしく興行きのある人間に育てるために欠くべからざるものであります。近年読書ということが忘れられ、読書離れ、文字離れということが言われております。そういうことを考えまして、子供たちに本を読んでもらう、そういう運動に對してこの財団は賞を差し上げることになりました」

選考委員会委員長の三浦朱門さんの表彰式での挨拶である。当時、私は選考委員会がとても楽しみだった。三浦委員長をはじめとする各委員の論議は知的興奮を呼び起こすものだった。

第1回の表彰について私は「高月町立富永小学校では平成9年から朝の読書が始まり、「読書芳洲賞」の設定、「読書ゆうびん」など様々な活動に広がっている。熊倉峰広教諭は、読書嫌いの生徒たちを「味見読書」という手法で、本の世界に誘導した。田所雅子さんは自宅に「わんぱく文庫」を開設して、地域の子供たちにいる本を提供し、その活動が学校や自治体との協力に発展している

のだった」と記録集に書いている。

ある中学で生徒の成績を調べたら読書活動が盛んに行われていた小学校からの生徒の方が、そうでない小学校からの生徒より数段成績が上回った。三浦委員長が指摘する「文化の中で決定的なのが言葉」だとすれば、言語能力を身につけた子供の学びが進展するのは当たり前だろう。

私が毎日新聞のワシントン支局長をしていたクリントン政権時代に米国ではヘッドスタートが叫ばれていた。つまり小学校のときから早めに頭を鍛えないと駄目だという考えだった。それがオバマ政権のアメリカでは「アーリーヘッドスタート」に進展していた。それは小学校で始めるのでも遅いという考えに基付く。幼児の時に言語能力でもスポーツでも芸術でも始めた方が良いというのだ。

こども読書推進賞は、ある意味で「アーリーヘッドスタート」を応援するものだった。5年間の審査を通して、日本全国で読書運動が認知され拡大していることが分かり、この賞の任務は終わった。

平成19年度に「こども読書推進賞」の最後の受賞者となったのは千葉県黒木秀子さん（昭30・9・13生）だった。黒木さんはスペインのM・サルト氏のグループが、子供の読書力を引き出すために1970年代以降開発を続けてきた「読書へのアニマシオン」の実施ノウハウを日本に導入し、普及している。

私の理解だと、アニマシオンはたとえば「舌切りスズメ」のお話を例に上げれば、集まった子供たちはそれぞれ役割を与えられる。スズメ役、おじいさん役、おばあさん役・・・

おじいさんが出かけた後、「このスズメはチyunチyunうるさいわね」とおばあさんに舌を切られてしまう。スズメ役を振られ

た子は真ん中に出て「エーン。エーン」と泣く。おじいさんが戻ったくんだりでは、おじいさん役の子が真ん中に出て「おやおやおは可哀そう」と演技する。

子どもを読書者に育てるには、一番読めない子の立場に立って「楽しく」「遊びの雰囲気で」「大人が心をこめて子ども言葉を受け止めて」行うことが大切というのがアニメーションのスタンスだ。私は日本の国が再び生き生きとした元気な国になるには子どもをしっかり育てるしかないと思っている。だから黒木さんのような方が表彰されたことがうれしかった。余談になるが私は房総半島の真ん中に「土壁の家」を造る計画だ。その家が出来たら「子ども本読みクラブ」を作ってアニメーションを実践するのが夢だ。

損得を超越した「みごとな人々」

40年間の社会貢献表彰の記録を読むと、当初はやはり戦後日本を支えた人々が多く表彰されている。震災孤児を引き取って里親になった人や、戦後の混乱からくる貧しい暮らしの中の助け合う人々。民生委員や保護司の活躍も目立つ。水難、火災などでも消防団員をはじめとする地域の人たちがそれぞれの役割をはたしている。

小さな集落で福祉、青少年の育成、環境保全から防犯まで住民が協力しあっており、人々の絆の強さが地域社会を支えている。

また警察官、消防士、保健婦、駅員、バス運転士、灯台守、郵便配達員らが一生を貫く仕事として誇りを持って働き、地域に溶け込んでいるのが特徴的だ。

今、日本では村や町から若者が都会に出て、高齢化社会の中で限界集落が増える一方である。国は町村合併で行政の効率化を図

り、都市部への人口集中に拍車をかけている。もはや過疎地では暮らしを支える若者世代は消え、地域の絆も壊れ始めているのが実情だ。

高度経済成長で豊かになったはずの日本で、無縁社会化が進行し、老人の孤独死や児童虐待などの悲しいニュースがあふれている現状をみると、かつての人々が支え合っていた貧しい時代の方が幸せだったと思えてくる。今一度、絆社会を取り戻すにはどうしたらよいのだろうか。

平成11年度の表彰式で曾野綾子選考委員長は次のように述べた。

「聖書の『使徒行伝』20・35には、『受けるよりは与える方が幸いである』という言葉があります。戦後日本の教育は個人の権利を主張することだけを目標において来ましたが、損になることは黙っていない、というのが戦後の人権教育の主流を占めました。しかし損になることを知りつつ、他人のために尽くせることこそ、人間の魂が偉大な存在であることを示しています」

また曾野委員長は平成14年度の表彰式では「日本も世界全体も今、むずかしい心の転機に向かっていているように思われます。人がするからいいことではない。人が始終口にするからだから正しいわけではない。むしろ一人一人が、時には命を賭けて個人の美学を全うすることが必要です」と挨拶した。

社会貢献支援財団は「みごとな日本人」と曾野委員長が心の中で呼んでいる人々を探し出し、そうした人々の偉大な魂や美学を少しでも世の中に伝えるためこの40年間の表彰を継続してきたと感じている。どの年度の記録集にも「みごとな日本人」や最近では国際化のため「みごとな外国人」も載っている。世界は資源の争奪や人口移動、気候変動など多くの難問を抱えているが、いつ

の時代にも損得抜きに自分がすべきことをやりぬく人々が社会を支えていることを忘れてはならない。最近の表彰事例はグローバルな課題に取り組む人が目立つようになってきた。

中央アジア・タジキスタンで停戦監視、和平支援などの「国連タジキスタン監視団」の活動に参加していた秋野豊さん（昭25・7・1生、北海道札幌市）は平成10年7月20日、山岳地帯で移動中に反政府勢力に銃撃されて殉職した。タジク語を独学し、住民のため赤痢が発生すると衛生環境改善に奔走するなど「ハダシの実証主義者」として尊敬された人だった（平成11年度表彰）。
医師の徳永瑞子さん（昭23・1・25生、東京都北区）は1971年からアフリカに何度も行き、医療活動を行い、1993年には中央アフリカ共和国の首都に「ブエラブ保健センター」を開設し、エイズ感染者の治療と生活支援、さらに感染予防に献身的に取り組んでいる（平成14年度表彰）。

NGOカンボジア地雷撤去キャンペーン（福岡市）は、代表の大谷賢二さんがカンボジアを旅行中に手足のない人、目の見えない人があまりにも多いことにショックを受けて平成10年から活動を始めた。1平方当たり当時は約1000円で地雷原をきれいに出来ることが分かり「これならば小学生でも支援できるではないか」と思ったという。地雷の撤去の他、被災者の救済活動も行っている（平成20年度表彰）。

40年の節目を越えて時代が要請する「みごとな人々」を社会貢献支援財団は表彰し続けるだろう。

ハチドリの一滴（ひとこぼれ）

平成22年度の社会貢献者表彰式典（11月16日、ANAイ

ンターコンチネンタルホテル東京）に参列していて、「みなさんすがすがしい顔をしておられる」と感じた。淡々となすべきことをしている人の顔は、金銭慾や名誉慾とは無縁だから脂ぎったところがない。

表彰状を受ける時はやや照れくさそう。はにかんだ笑顔が素敵だった。

駅前の乱雑に置かれた自転車を22年間、きれいに整理している前橋市の植原康治さん（82）や、荒れ放題の山林の環境保全を20年続けている出雲市の山崎一誠さん（74）らの日々のたゆまぬ活動が、社会を支えていると思いつつながら壇上を見上げていた。

そしてこの日、表彰された川原尚行さん（45）が受賞者を代表してあいさつした。川原さんはスーダンに日本大使館医務官として勤務していた時、たくさんの子供がマラリアやコレラで亡くなるのに診療が許されないことから外務省を辞めて、スーダンでの医療活動に邁進した人だ。新聞で大きくその活動が報じられていたことがあり、「何て素晴らしい人がいるのだろう」と感激したことがあったので、川原さんからどんな言葉が飛び出してくるのか期待した。

川原さんは「辞めたことで外務省を批判するわけではありません。批判からは何も生まれません」と、批判ではなく自分の思いでスーダンでの診療に踏み切ったことを説明した。

駅前の自転車置き場の乱雑さにあきれ、山林が荒れているのに憤るが、何もしないのが私を含めたごく普通の人だ。しかしただ批判するだけの精神構造と無縁なのが植原さんや山崎さんらで、川原さんも同じ心を持っていた。

川原さんは「あなたの活動は、ハチドリの一滴」という話に似

っていると人に言われたことがあるんです」と話を続けた。「ハチドリの一滴」は私も大好きな話だ。5年ほど前に娘からもらった本を今も大事に持っているが、こんな話だ。

山火事が起きて森の動物たちは必死に遠くに逃げ延びた。すると一羽のハチドリがその小さなくちばしに水滴をためて山火事の現場に飛んでたらしているではないか。沢山の動物たちが「何て無駄なことをしているんだ」とハチドリを笑った。するとハチドリは「僕は僕の出来ることをやっているだけです」と言い、何度も何度も火事の現場と泉を往復していた。

川原さんは「ハチドリのように僕も自分なりにやればいいのかな」と思ってスーダンでの活動を続けていると語り、「今後も一滴の水をたらし続けていこうかなと考えています」と述べてあいつつを締めくくった。

レセプションで川原さんと会って、「あの話は何万羽もの鳥がハチドリにならって水滴を運んで山火事を消したんですね」と言うと、川原さんは「そうなんですよ」とうれしそうに笑った。がっしりした体格の川原さんは身体全体からプラスエネルギーがほとぼしっているような前向きの人だった。握手した手は肉厚で頼りがいがあった。あいつつで川原さんは、ハチドリに触発された沢山の鳥が火を消し止めたというお話の後段に触れなかった。世の中は、なかなかお話のようにはいかないという現実があるからあえて後段に触れなかったのかもしれない。

表彰選考委員を代表して脚本家の内館牧子さんが「今年ほどくに暗い事件が多かった。日本はどこへ行くのかと思う。そうした中で皆さんには私たちの方が励まされる。日本も日本人も捨てたものではない」と述べた。

40周年を迎えた社会貢献者表彰は内館さんが言われたように

「とっさに身体が動いた」「放ってはおけない」と損得を抜きに社会に貢献した人々を表彰し続けるだろう。たとえそれがハチドリの一滴であろうと、それに気がつくことが何か素晴らしいことの連鎖につながると信じて。

「手本として、われわれもまた」

社会貢献者表彰の記録を見ると、会長、役員、選考委員はほとんど交代している。ところが常陸宮殿下、同妃殿下は39年間に亘って表彰式にご臨席されている。実はこれは大変なことではないだろうか。毎年のご予定にこの表彰式を入れてくださり、別の予定より、優先し続けてくださったのだ。

私は宮内庁担当記者をしたことがあるが、皇族方に随行していて「大変なお仕事だな」と思うことが多かった。一端、外に出られたら沢山の人の注目を浴びるが、けして無視はされない。手を振られたり、会釈されたりをずっと続けられるのだ。しかも偉い人であろうと、一般の人であろうとまったく同じ態度なのである。そして車イスの人やお年寄りには近寄って声をかけるなど優しい。つまり公平で思いやりがあるのだ。

日本人はそうした皇族の存在を肌で感じているに違いない。表彰式に宮様が現れると、会場がとても良い感じに引き締まり、多くの顔が幸せそうに輝く。社会貢献者表彰式典は常陸宮様と華子妃殿下のご臨席でとても良い雰囲気が続いてきた。

ご臨席は39年間で終わることになったが、沢山の公務を整理されるのに伴うことだから已むを得ないし、ただただこれまでのご臨席を感謝したい。

平成21年度の宮様のお言葉は「皆さんが、これからも一層活

躍されることを期待するとともに、皆さんの立派な行いを手本として、われわれもまた、少しでも世のため人のために尽くしたいものであります」と締めくくられていた。

「手本として、われわれもまた」というお言葉を、39年間のご臨席の記憶とともに今後ずっと胆に銘じなければならぬと思う。

さて常陸宮華子妃殿下の父、津軽義孝氏との運命的な出会いで日本に来たロシア人が平成19年度に社会貢献者表彰を受けていることをここで紹介しておきたい。

エフゲニー・ニコラエビッチ・アクシヨノフさん（大13・3・5生）は、東京・六本木に「インターナショナル・クリニック」を開設し、50年以上にわたり来日外国人や在日外国人を診療し「六本木の赤ひげ先生」とも呼ばれている。マドンナ、マイケル・ジャクソンから各国大統領まで様々な人を治療しているが、貧しい患者は無料で診察したり、場合によっては生活費の支援も行う。「人間はどんな人にも治療を受ける権利がある」と語り、「病気以外について患者に聞く権利がない」とパスポートや外国人登録証明書の提示は求めない。

アクシヨノフさんの父は1917年のロシア革命後、白軍の将校として赤軍とシベリアで戦い、敗れてハルビンに亡命。追いかけて亡命してきた母との間に1924年、アクシヨノフさんは生まれた。1932年に満州国が樹立され、建国10周年で視察に来た津軽義孝氏とアクシヨノフさんは知り合い意気投合した。医者になりたかったアクシヨノフさんが1943年に日本に留学することになったのは津軽氏の強い勧めと助力があったからだだったが、二人の親交は1994年に津軽氏が亡くなるまで続いた。

津軽氏が満州で通訳をしたアクシヨノフさんにドイツ軍に占領されていたパリの代わりに日本に医学留学するように勧めたのだが、「私が面倒を見ます」という約束をちゃんと守ったからアクシヨノフさんの日本での人生が始まったのだった。

そのアクシヨノフさんの表彰に津軽氏の娘である華子妃殿下がご臨席だったのも何かのご縁なのかもしれない。この表彰式の後レセプションで私は毎日新聞社のモスクワ支局長などを務めた飯島一孝さんにはったり出くわした。聞けば戦後史を取材するためアクシヨノフさんのインタビューを続け、「六本木の赤ひげ」という本（集英社）を出したばかりだという。この本にはスパイ扱いまでされたロシア人医師の波乱万丈の戦中、戦後の生きざまが詳しいが、アクシヨノフさんの医師としての志が一貫していることが良く分かる。

さてもう一つ皇室絡みの特筆すべき事例を紹介したい。平成16年度の社会貢献表彰を受けた藤岡博昭さん（昭2・10・18生、岡山県吉備郡）のケースである。

藤岡さんは中学校の特別支援学級の担任だったが、知的障害の教え子が不況時に真っ先に解雇の対象になるため「バカにされず、安心して働ける場所が欲しい」と「たけのこ村建設20年構想」を作成した。1976年に教職を辞し、退職金と私財で吉備郡の山麓4町歩の土地に入植した。公的資金は受けず知的障害児の社会的自立を目指す村作りだった。ランプと山水の貧乏生活に耐え、農耕を中心とした自給自足を実現する一方、備前焼や埴輪制作をマスターして経済的自立を目指した。

1971年、まだ藤岡さんが「たけのこ学級」の担任だったころ、生徒たちが偶然2回も皇室アルバムというテレビ番組を見た。藤岡さんの著書「やったらできた」という本（講談社）によ

ると、1回目の番組（浩宮さまが、りりしい乗馬姿でにこやかに乗馬をされているシーンと、白バイの先導である場所にてかけられ、お出迎えの人たちにあいさつをされているシーン）をみて、生徒は「先生、あの子は誰？どうして、あの子に大人が頭を下げるかのう。わからんのう」などと反応したという。

2回目に見た番組（浩宮さまがはにわを制作されているシーン）には生徒は「先生、この前にテレビに出ていた子が、はにわをつくつとるよ」「僕たちのつくつたはにわを送ってもええかのう」などと親近感を持ったようだったという。

藤岡先生は、はにわを送るといふ生徒の提案に驚き戸惑ったが、ようやくやればできるといふ自信めいたものが芽生えてきたところだったので、実現に動いた。

「はいけい ひろのみやさま

ぼくらは、テレビでみました。さいしよは、うまにのつて、いばっているようにみえました。それから、かっこいいしろバイは、よかったです。ぼくらはにわづくりは、につほん一です。だから、はにわをおくります。このはにわは、かたよろいぶじんです。それに、ぼくらは、ガリばんで、たけのこしんぶんをつくっています。けんどうも、せんせいがおしえてくれます。ともだちになつてください。さようなら」

こんな手紙つきで躊躇する運送屋さんに頼みこんで皇居の二重橋の門衛のところまで生徒たちのはにわは運ばれた。届いたかどうかも確認が出来ないまま約1年が過ぎた1972年5月、突然「東宮御所にお招きしたい」というメッセージが届いた。藤岡さんは全身がガクガクと震えて止まらなかつたという。

生徒と藤岡さんは皇太子ご夫妻と浩宮さまにお会いし、その時以来、交流が続いている。藤岡さんが吉川英治文化賞を受賞した

時はお祝いの夕食会に招いてくださり、「たけのこ村」が開村した時には「日本の福祉のバイオニアとして育つことを希望する」といったメッセージがお祝いのカキ、クリ、ナシなど果樹の苗木15本ともに届けられた。備前焼の穴窯の火入れ式には「たけのこ村は、太陽の村だから、太陽の火を初窯の火にしたらよい」と、太陽からレンズで採火した火をくださったのだった。

「たけのこ村」は、活動の場を岡山県の倉敷市に移し、「太陽の火」を希望と勇気の灯として頑張っているが、日本の皇族は「国民の幸福と平和を願われ、特に障害者の人たちへの深いご関心と暖かいお心を持っておられる」（藤岡）のだ。常陸宮殿下、同妃殿下の39年という長期間に亘る表彰式へのご臨席はそうした精神の体现であつたと思う。

「40年間の記録集を読んでみて」

「ナゼ社会部記者のころ、こうした社会を支えている人々のことをもつと書かなかつたのか」と読みながら考えた。多分、悪人が起こす事件の方が「驚き」が大きくニュースバリューがあるからというのが答えだろう。

確かに殺人、強盗、放火、脅迫など大きな事件は世の中の関心を呼ぶ。だが本当は警察の捜査情報に乗っかれれば記事が容易に書けるからという理由もあつたのではないか。新聞社もテレビ局も企業である以上、取材の効率（経済性）を求める。簡単に視聴率が稼げ、当局の権威に依存できる事件に報道が集中するのはそうしたビジネス上の理由もあるのだ。

ところが地道にひたむきに社会貢献している人々のドラマは警

察発表を期待できない。メディアが自らの足で探さなければ見つけることが出来ないのだ。あちこちにアンテナを張り、自らの見識で「みごとな人」を見つけなければならぬ。しかも「みごとな人」は謙虚で派手な宣伝とは無縁だから目立たない場合がある。

また「みごとな人」をねたんで悪口をいう人もいるから、そうした悪意も乗り越えなければならぬ。

社会貢献支援財団は、自らの責任で「みごとな日本人や外国人」を表彰してきた。人の嫌がるし尿処理などの仕事に従事した人々も視野に入れて表彰している。また特に最近では各方面から推薦を受けるだけでなく財団職員が現地に飛んで調査するという現場主義を貫いている。

ノーベル化学賞を受賞した二人の学者が、すぐ文化勲章も受章した。まるでノーベル賞の後追いである。私はお二人は文化勲章に値する方々だと思ふから受賞そのものには異議はないが、日本政府には自らの責任で文化勲章を決めてもらいたかった。ノーベル賞受賞者なら文句は出ないだろう、という安易な決め方が気に食わない。ノーベル賞委員会は大変な経費をかけて自らの責任で受賞者を決めるから権威があるのだ。

余談になってしまったが、社会貢献支援財団は他の権威に寄り掛からず「みごとな人」を探し出し表彰し続けるだろう、と思ふし、私がかつて働いていたマスメディアは警察、検察情報とか、政府や官庁、大企業から提供されるネタに頼るのでなく、足で稼いで発掘したニュースを主に報道すべきだと思つたのだ。

中島健一郎

1944年生まれ。東京大学文学部社会科学卒業後、毎日新聞社に入り、浅間山荘、金大中、連続企業爆破、ロッキード、慶応不正入試、阪神大震災、オウム真理教事件などの他、殺人事件の捜査本部を57件担当。

ワシントン特派員として、レーガン、クリントン両政権時代を取材し、米軍のグレナダ侵攻、中米紛争など戦地にも行く。警視庁キャップ、ワシントン支局長、社会部長などを歴任。事業担当常務を2006年に退任する。

現在は社会貢献支援財団評議員の他、食の安心安全財団理事、NPO日本スポーツ芸術協会理事。大正大学客員教授としてジャーナリズム論を教える他、房総半島の高滝湖近くで自然の中での暮らしを実現するグリーンエネルギーや伝統技術を使った山村住宅開発に取り組んでいる。